

横断歩道

登場人物

少女 シングルマザーに育てられるも、その母親も事故で亡くした。毎朝、花束を交差点にお供えしている。

ホームレス ホームレスとして生活をしていて、みんなから煙たがられている。周りに迷惑をかけないようにと、気を使いながら生きている。いつか自立したとき、家族に会おうと、連絡先を古い携帯電話に残している。

警察官

交番勤務のおまわり。
面倒くさがりやで、警察官とは思えない言動をする。狭いコミュニティのおまわりが故、横暴さが目立つ。

あゆみ

たけしのことが好きだが、その思いを打ち明けられないでいた。

たけし

あゆみの好意に気づいているが、自分は人を好きになっただけがなく、それをどうしていいのかわからずにいる。

大学生

高校のときには、甲子園で優勝するくらいの投手であったが、大学の野球部で理不尽なしごきを受け、心を病む。ホームレスに対して暴力を振るいストレスを発散していた。

ゴミ拾いの男

平日は仕事に行きながら、夕方はごみを拾うボランティアの男。地域のためにと言っているが、実際は自己満足で、ホームレスのような存在を許せない。

婦人

近所に住む普通のおばさん。よく声をかけるため、広く知られている。

舞台中央に歩道橋がある。

そして舞台上手にはバス停がある。舞台中央の歩道橋の下。安全地帯にあたる場所に、

花束がぽつりと置かれている。

舞台は最初、闇に包まれている。

花束のまわりから徐々に周囲が明るくなると、少女がひとり花束のそばに立っている。

少女は花束をじっとみている。

少女の手にはまた別の花束がある。

しばしの沈黙

そしてどこからともなく男の声が聞こえてくる。

声 おーい。おーい。

少女 だれ

声 わたしだよ、わたし。

少女は振り返る。も、誰もいない。

声 こつちだよ、こつち。

逆のほうへと振り返ると、男が立っている。

(この男はホームレス役の男が演じる。)

少女 お父さん？

男 だれなんだい？

少女 わたしだよ、お父さん

男 じゃなくて
少女 うん？
男 それ

男は、花束を見ている

男 だれの花束？
少女 お母さん
男 じゃなくて君が持っている方
少女 これ？
男 うん
少女 わからない
男 わからないの？
少女 悲しい
男 だれかわからないのに悲しいの？
少女 だれかわからないから悲しいの

と少女が言った瞬間、少女にサーチライトが照らされる。

振り向くと制服姿の警察官が立っていた。
さきほどの男はもういない。

警察官 あー、また君ね。
少女 え
警察官 夜中に中学生くらいの子が歩いてるって連絡があつてね。
少女 はあ
警察官 君、何回目？こつちも大変なんだからさあ。
少女 すみません
警察官 まあ、いいけど。はい、早く帰ってね
少女 ありがとうございます

少女が去った後、警察官がひとり舞台に残る。警察官はさきほどまで少女がいたところの花束を一瞬見る。そして、無線機を取り出した

警察官 はい、問題ないです。誰もいませんでした。

と、気だるそうに報告すると、頭をかきながら帰っていった。

警察官が舞台から去り、舞台には誰もいなくなった。

夕方の風景

舞台が少しずつ明るくなる。

あゆみ だから一次元はこう横に伸びる直線、二次元はそれが

さらに広がった平面。

たけし うん

あゆみ それで三次元は高さが加わった空間。

たけし うん

あゆみ わかる？

たけし わかるけど

あゆみ けど？

たけし わからない

あゆみ どっち

たけし いや、意味はわかるよ。わかるけど、だから何？って

いうか、それで結局どうなるの

あゆみ たけし君が聞いたんじゃん

たけし テストだから

あゆみ 知ってる

たけし そう、だから嫌々聞いた。だから

あゆみ 知ってる
たけし だから
あゆみ だから嫌々誘った？
たけし え？
あゆみ たけし君が誘うわけないもんね、わたしを
たけし 違うって、だから
あゆみ だから何よ
たけし だから映画行きたい
あゆみ テストなの？
たけし テストだけど
あゆみ いいよ

たけしとあゆみが話している歩道橋の下では、ゴミ拾いの男が歩いてくる。
ゴミ拾いの男は、周りのゴミを集めながら、近くのバス停にたどりつく。男は、バス停のベンチ、看板、時刻表と順番に拭いて回る。
同時に、婦人もまたバス停に歩いてくる。

婦人 あらあら、どうも、いつもご苦勞様です。
ゴミ拾いの男 ああ、どうもこんにちは。
婦人 とても助かるわ。
ゴミ拾いの男 いえいえ、とんでもない。散歩がてらですか。
婦人 偉いわ。本当に。あ、ちよつと失礼。今、何時かわかりますか。
ゴミ拾いの男 (腕時計をみながら) あと五分で16時になります。
婦人 あら、ありがとう。(と、時刻表をみる)
ゴミ拾いの男 もう、バスないですよ
婦人 え、でもここに
ゴミ拾いの男 今日、祝日ですから。

婦人 そうだったかしら。
ゴミ拾いの男 ええ。だからこっち。こっちの時刻表をみないと

婦人は、時刻表をみると、残念そうに

婦人 あらやださつき行っちゃったのね
ゴミ拾いの男 そうですね、休日はバス早いですから。
婦人 それは残念、どうもありがとう

と、いいながら、婦人は去っていった。
残ったゴミ拾いの男もまた、掃除を終えて歩き出した。
それと入れ違うようにポロポロの身なりの男がよたよたと歩いてきた。男は、空き缶が大量に入った袋を持っている。風貌からして、どうもホームレスのようだ。
ホームレスは、バス停にたどりつくと、ベンチに座る。どうやら、彼はバス停で夜を明かしているらしい。

ゴミ拾いの男は、入れ違ったホームレスの姿を眺めながらため息をひとつ。何も言わず去っていった。
ホームレスは、一息ついたあと、ベンチに横になる。段々と暗くなる。

そこに、あゆみとたけしが戻ってきた。

たけし なんか納得いかないんだよなあ
あゆみ なが

たけし いや、最後
あゆみ 最後？
たけし うん、映画の
あゆみ 最後？最後、どんなんだっけ？
たけし え？ほら、主人公とヒロインが再会してハッピーエン
ドみたいなの
あゆみ ああ、うん
たけし 寝てたの？
あゆみ いや、そういうんじゃないよ、覚えてたよ、覚えてた
けど
たけし けど？
あゆみ けど、なんでもない。
たけし なにそれ
あゆみ ごめん
たけし ああゆうのつてき、なんか、最後幸せになっとけばいい
みたいでつまらないっていうか、単純っていうか。
あゆみ そういうの好きそうだけどね
たけし なんです？
あゆみ 単純そうだから
たけし うそ、おれが？
あゆみ うん
たけし そりゃ、あゆみみたいに、勉強とかできないけどさ、
俺だつて色々考えるんだから
あゆみ いろいろ？
たけし うん、いろいろ
あゆみ なによ
たけし いや、いいだろ別に。
あゆみ いいけど別に。
たけし そう、だからさ、なんていうか、必ずしも、主人公と
ヒロインは結びつかなくてもいいとおもうんだよなあ
あゆみ そうなんだ
たけし うん、ごめん、変な話して

あゆみ いや、ちよつと驚いた。
たけし もつとバカだと思つてた？
あゆみ うん
たけし おいおい
あゆみ 明日、テスト
たけし あー、忘れてた
あゆみ 忘れたかつたんでしょ
たけし まあね
と、そこに警察官が自転車に乗ってくる。
警察官はあゆみとたけしをみて、自転車から降り
警察官 君たち、高校生？
たけし あ、はい
警察官 (時計をみせながら) はい、もう帰る時間
あゆみ あ、はいすみません。もう今から帰るところです。
警察官 ほら、はやく帰って。最近、ふざけた通報多いんだか
ら。
あゆみ ふざけた通報？
警察官 君たちみたいな子供が夜中にうろついているとか、幽霊
がでたとか。ほんとこっちは暇じゃ無いんだから
あゆみ はあ
警察官 はい、だから帰って。仕事増やしたく無いんだから。
たけし じゃあ、失礼します。
警察官 はい、はやくはやく
たけし とあゆみは一礼したあとと去っていく。
警察官もまたもと来た道に戻る。そこには、ホームレ
スのいるバス停がある。
警察官はバス停にいるホームレスを一瞥し、何も言わ
ず去る。

たけし　なんか感じ悪いお回り

とたけしが言うと、あゆみが足をとめる。それに合わせてたけしもまたその場に立ち止まる。

あゆみ　そう？

たけし　うん

あゆみ　まあ、実際事件とか聞いたことないし。

たけし　それはそうだけど、なんかあのしゃべり方、嫌い。
あゆみ　まあね

しばし沈黙

たけし　じゃあ、俺、こっちだから。

と、たけしが歩き出す。

あゆみ　あー、そうだったね。

たけし　うん、じゃあね

あゆみ　あつ、

たけし　うん？

あゆみ　あー、なんでもない

たけし　何か言いたいことでもあるの？

あゆみ　いや、別に

たけし　そう

あゆみ　うん

たけし　じゃあね

あゆみ　うん…

と二人は別々のほうへとあるいていく。

舞台には再びホームレスだけになった。

ホームレスは起き上がり袋から空き缶を取り出し潰していく。ひとつ、ふたつ、みつつ。静かな夜に空き缶をつぶす音が響き渡る。

よつつ、いつつとつぶしたとき、後ろから大学生の男がやってくる。大学生は、ホームレスのほうをじっとみて立っている。そして、しばらくしたあと

大学生　おい

ホームレスは気にせず空き缶をつぶしている。

大学生　無視すんなよ

それでも、ホームレスは大学生を見ることもせず、空き缶をつぶしている。

大学生　くそが

ホームレスが次の空き缶を置くと、大学生はその空き缶を蹴り飛ばす

ホームレスはその空き缶を拾いにくくと、大学生は、袋の中の空き缶を取り出し、ホームレスに向かって蹴りとばす。

大学生　くそが、くそが、くそが

袋の中の缶がなくなると、少年は満足したかのように、去っていく。

ホームレスは、その後ろ姿を一度みて、その後、散らばった空き缶を拾い、また空き缶を踏みつぶし始めた。

次第に明るくなっていき、朝になる。
ホームレスはバス停から去っていく。

横断歩道でたけしが歩いている。あゆみが後ろからきて、合流した。

ゴミ拾いの男は、スーツ姿で仕事に行く。

婦人はゴミ出しに行っている。

大学生は朝からランニングをしている。

警察官は自転車に乗って気だるそうに巡回している。

遅れて少女がやってきて、舞台中央で花束を供えなおしている。

大学生と婦人の目が合う。

婦人 あら、おはよう

大学生 おはようございます

と、はきはきと挨拶をする大学生は、ホームレスに暴言を吐いていた人のように思えない。

婦人 今日も元気ね

大学生 ええ。

婦人 野球まだやってるの

大学生 はい。

婦人 ほんとう、よかった

大学生 え？

いや、私まだおぼえてるのよ、あなたたちが高校のとき野球の大会で優勝したの。ここらへんみんな、大騒ぎしてたんだから。だから頑張るのよ

大学生 ああ、どうも

婦人 あ、ごめんなさいね、運動中に

大学生 いえいえ、大丈夫です。

大学生は少し気まずそうに走り去っていく。

婦人もそのまま去っていく。

人々の往来がやみ、残されたのは少女一人。

そこにホームレスの男が缶を集めながら歩いてきた。

少女 はい、これ

といい、なにかを渡す。

ホームレス ありがとう

ホームレスと少女はベンチに座る。

ホームレスは渡されたものを取り出し、口にくわえた。どうやらパンのようだ。

少女 その横断歩道の先の店の

ホームレスは途中でむせる。

少女 大丈夫？あ、レーズンだめだった？

ホームレス いや、大丈夫。久しぶりにおいしいもの食べたから、のどにつまってる。

少女 はい、これ飲み物

ホームレス いつもわるいね。

少女 別に。好きでやってるから。

ホームレス 今日も学校は休みかい？

少女 うん

ホームレス そうか。たまには教室に行ってみるのもいいんじゃないかい

少女 いや、いい。

ホームレス どうして

少女 おじさんだって

ホームレス なにが

少女 おじさんだってそうじゃん。

ホームレス 私だって高校までは学校に行つたさ。

少女 そうじゃなくてさ、

ホームレス なに

少女 仕事

ホームレス ああ・・・

少女 冗談

ホームレス 冗談？

少女 おじさんだって働いてるもんね

ホームレス え？

少女 ほら、それ。

少女はホームレスの持っている空き缶を見ている。

ホームレス ああ、これか

少女 それってさ、どのくらなの？

ホームレス まあだいたい300本くらいかな

少女 じゃなくて、それで何円くらい稼げるの？

ホームレス 500円くらいかな

少女 そんなに頑張つてそれだけ？

ホームレス まあね

少女 そっか。

ホームレス 同じ空き缶でもスチール製とアルミ製があつて

ね、こつちのスチール製はほとんどお金にならない

い。だからアルミ製だけ選ぶんだ。

少女 へえ

ホームレス こんな感じの銅線なんかはもつと高い。珍しい金

属ほど高くなる。こういうのをもらつてきて生活してんだ。

少女 大変だね。

少女は、ホームレスの持ち物を一緒にみていく。と、そこに携帯電話があることに気が付いた。

少女 なにこれ

ホームレス ああ、それは携帯電話

少女 こんな形なんだ

ホームレス ああ、昔のだからね。

少女 ちよつとさわつていい？

ホームレス ああどうぞ

少女 つかない

ホームレス もう充電切れてるから

少女 つかうの？

ホームレス いや、つかわないさ。そもそもつながらないし

少女 あ

ホームレス うん？

少女 いいこと思いついた

ホームレス なに

少女 これを売つたらいいじゃん。

ホームレス これを？

少女 うん。お金になるんでしょう、こういうの。

ホームレス まあそうだけど

少女 けど？

ホームレス それは売らない。

少女 どうして

ホームレス 大切だからだよ

少女 大切？

ホームレス 連絡先が入ってる、家族の。いつか連絡できたら
少女 家族・・・
すこしの間沈黙が流れる。

そのタイミングで、舞台の下手では、大学生がきた。
大学の野球部の練習のようだ。
トレーニングウェアを着てアップをしている。そこ
に、野球部の先輩が入ってくる。

野球部の先輩 あ

大学生 どうも、お疲れ様です。

先輩 なにそれ

大学生 え？

先輩 それ、スパイク

大学生 新しく買いました。先月、バイト頑張ったので

先輩 貸してよ

大学生 え

先輩 え、じゃなくて、貸して。

大学生 でも

先輩 いやー、俺の古くてさ、新しいの欲しいんだよね

大学生 貸したら、僕が練習できなくなります。

先輩 いいじゃん、どうせ球拾いだし。っていうか、練習来な
くていいよ。うん。

大学生・・・

先輩 はい、ありがとう

といい、スパイクを奪い、去っていく
大学生は意気消沈している。その姿はどこか怒りをお
さえているように見える。

だんだんとあたりが暗くなる
少女とホームレスの男は、歩道橋の上にいる。

少女 一日中バス停にいてつまらなくない？
ホームレス 一日中いるわけじゃないさ。空き缶集めにまわら
なきゃいけないし、休憩するときは、図書館で本
を読んだりしてる

少女 へえ、勉強するんだ

ホームレス 君も勉強しないと

少女 みて、あれ。

ホームレス どれ

少女 そこ

ホームレス ああ、さっきのバス停

少女 じゃなくてその隣、横断歩道。

ホームレス うん

少女 ピアノみたい

ホームレス え？

少女 白、黒、白、黒、白、黒

ホームレス ああ・・・でもピアノは白のほうが多くない？

少女 そういうんじゃないって

ホームレス どういうのさ。

少女は横断歩道を鍵盤に見立てて手を動かしながら曲
を口ずさむ

ホームレス なんだっけその曲

少女 月

ホームレス 月？

少女 うん、月。月のなんとか

ホームレス なんとかかってなんだよ

少女 わかんないよ、月の曲って習ったんだから。

ホームレス だれに

少女
・・・おかあさん

少女は、そのまま手を動かし続ける。
彼女の真剣な伴奏からは本当にピアノの音色が聞こえてきそう。

その歩道橋の下には、たけしとあゆみがいる。
彼らの会話は交互に繰り返される。

たけし

1961年、宇宙船ボストークで地球を飛び立ったユーリ・ガガーリンは人類で初めて宇宙から地球を見た。そしてこういった「地球は青かった」そしてその後、アポロ11号計画で人類は初めて月に上陸。人類がずっと見ていながら辿りつかなかったあの星にたどり着いたのです。そしてこれがその月の一部が隕石として落ちてきた石。そう、月の石なのです！

と、持っている石をあゆみに見せる。

あゆみ ばかみたい
たけし それ誉め言葉？
あゆみ うん
たけし やっぱり
あゆみ よくそんなフィクション思いつくね。
たけし フィクション？
あゆみ え？本気で言ってるの？
たけし ああ、本当さ、だってガガーリンだってアポロ11号
あゆみ だって教科書に載ってるだろ
たけし そうじゃなくてそのあと
あゆみ これ？
たけし そう、月の石だとかなんとか
あゆみ これは正真正銘月の隕石

あゆみ なんでわかるの

たけし なんかく持つと感じるものがあるんだよ、こう月の魔力っていうかなんていうか

あゆみ たばこ屋の自動販売機の前に月の魔力が落ちてるわけ？

たけし なんだよ、邪魔しないでくれよ。こっちは、楽しんで

あゆみ あきれた。高校生にもなつて中二病気分が抜けてないだなんて

たけし 悪いかよ
あゆみ いいや、別に

あゆみ 分けてよ、わたしにも。月の魔力。
と、あゆみはほほえんだ。

あゆみ 分けてよ、わたしにも。月の魔力。

と、あゆみはほほえんだ。

少女

お母さんのこと、ずっと嫌いだった。
シングルマザーだったから、大変だったんだろうけど、しつげが厳しくて、気に入らないことがあったらすぐ殴る。一つピアノの曲が弾けるようになるごとに痣は3つずつ増えていったの。

だからね、お母さんが交通事故で死んだときはね、はじめは、正直ラッキーって思ったんだ。

ホームレス 交通事故・・・

少女 うん、ここ。ちようどこの交差点で死んだんだ。私は、遠い親戚のおばさんに引き取られた。すごく優しいの。なにがあつても怒らないし、お金に不自由ないし・・・

ホームレス 花束

少女 え？

ホームレス あの花束

少女 ああ、あれ。あれはお母さんへのお供え物。まあ、一応、恩返し、みたいな。だからね、家族っていうのがよくわからないんだ。

まあ、そもそもいないからないものねだりしても仕方ないっていうのはあるけど。

ホームレス そうなんだ。

少女 おじさんの家族はどんな人？

ホームレス え？

少女 さっき言ってたじゃん、家族って。

ホームレス 忘れた。

少女 忘れたって何？家族なのに？

ホームレス 家族だけど忘れた。もうだいぶ前だから。

少女 なにそれ。変なの。

ホームレス お互い様さ。

少女 まあ、そっか。

あゆみ ねえ、知ってる？

たけし ん？

あゆみ 月がきれいですね。

たけし うん、きれいだね。

あゆみはたけしのほうをじっと見る。

たけしはあゆみのほうをみない。

そのまま時間がたつ。

あゆみ 知ってるの？

たけし 告白の言葉でしょ

あゆみ 知ってたんだ。

たけし 知ってるよ

あゆみ 知ってて無視したんだ

たけし ちがうよ、ただ。

あゆみ なに

たけし ごめん

あゆみ なんて謝るの？

たけし ごめん・・・

あゆみ 馬鹿

といいあゆみはさっっていく

たけしは、悲しそうな目であゆみを見送る。

しばらくした後、たけしは帰っていった。

舞台には少女とホームレスが残っている。

そこに、警察官が自転車にのってやってくる。

警察官

あ、どうも。また通報があつて、ここに女の子の人影

がるって。そしたら、またあんなたち。いい大人がさ

あ、こんな遅くに女の子連れ出したらだめじゃん

ホームレス え

警察官 いや、えじゃなくて、わかるでしょ。条例違反。ま

あ、逮捕とかはしないけどさあ、仕事増えるし。や

めてくんない？

少女

いや、これは私がここにいたいからいるだけで。

警察官

君の親も心配してるんじゃないの？まあ、こんな遅く

まで帰ってこない娘を放置する親も親だと思っけどさあ

少女 そんな言い方

警察官 ああ、ごめんごめん。もういいから、帰って。

少女 はあ

警察官 こっちも仕事なんだからさあ、ね、はやく

警察官に言われるがまま、少女はさっっていく。

警察官は無線に向かって

警察官

はい、確認しました。不審者？いませんいけません。まだだれかのいたずらですって。

警察はそのまま去っていった。ホームレスの男はひとり残る。一晚をあかすために、彼はいつものバス停のベンチへすわる。

そこに大学生がやってくる。疲れ切った顔をしている。彼の着ているスポーツウェアは傷だらけで、理不尽なしごきを受けたようにすら思える。

大学生は、ホームレスの前になると、突然、ホームレスを殴る。倒れたホームレスに何度も蹴りを入れる。ホームレスは自分を守るように縮こまる。

しばらく蹴り続け、大学生も息をきらしたところで、自転車に乗った警察官が再びやってくる。大学生は焦り、身をひるがえす。

大学生は何事もなかったかのように、警察官に一礼をし、去っていく。

警察官

ちよつと、君

といいながら自転車を降りた警察官は、ポケットに手をつっこみながら声をかける。

大学生

はい

警察官

・・・大学生？

大学生

はい、大学生です。

警察官

そう、気を付けて

大学生

ありがとうございます

ポケットに手を入れたまま警察官は少年を見送る。視界から大学生がいなくなった後、ホームレスのほうへ向き直る。弱っているホームレスを見て、ほくそ笑む。

警察官

ここ、公共の場所ですから。

といい、鼻歌を歌いながら自転車に乗り、そのまま去っていった。

ホームレスはそのままうずくまり夜を明かした。そして朝が来る。

ホームレスは朝になると、どこかへと出かけていく。横断歩道でたけしが歩いている。しかし、うしろにはあゆみはいない。

ゴミ拾いの男は、今日は仕事がないのだろうか、ジャージ姿でゴミを拾い集めている。婦人はいつものようにゴミ出しに行っている。

大学生は朝からランニングをしている。警察官は自転車に乗って気だるそうに巡回している。

遅れて少女がやってきて、交差点の角に花束を供えなおしている。

たけしはあゆみを探すもあゆみはいない。やがて忙しい人の行き交いは終わると、あゆみが遅れてやって来る。あゆみは昨夜のことをひきずつている

ようだ。彼女の手にはたけしからもらった「月の石」を持っている。

あゆみ

なにが月の石よ

といい、あゆみは月の石を道端に放りなげた。あゆみがそのまま歩いていなくなると同時に、ゴミ拾いの男がゴミをひろいながら歩いてくる。そして少しした後、ホームレスが向かいからやってくる。

ホームレスはいつものように、袋の中に空き缶を入れて運んできて、近くのゴミ箱から空き缶をあさっている。

ゴミ拾いの男はホームレスのことを気にしつつもゴミを拾っている。

しかし、ゴミ拾いの男は、耐えかねたかのように口を開く。

ゴミ拾いの男 ああ

ホームレス はい

ゴミ拾いの男 やめてもらっていいですか

ホームレス なが

ゴミ拾いの男

その汚いの。あー、いやほらね。私、この町がきれいになればいいなって、ゴミ拾いしてるんです。でもねえ、そんな感じでゴミを荒らされたら、全部台なしっていうか。

ホームレス 別に散らかしてるわけじゃなくて

ゴミ拾いの男 ゴミを集めてるっていいたいんですか？

ホームレス まあ、はい

ゴミ拾いの男 ゴミがゴミを集めてもゴミなんですよ

ホームレス なんです

ゴミ拾いの男 だからゴミだって言ってるんです。あなたが

この町の景色を汚すゴミ。

あの、お金が必要ならあげるんで、どっか行ってもらえませんかね、僕の視界に入らないところ。

ホームレスは無言で、空き缶を集め続ける。

ゴミ拾いの男 ねえ、聞いてます？必要なんでしょう？お金。

あげますから、どっか行ってくださいよ。

と、ホームレスの男は1000円札数枚を男にちらつかせながらにじり寄る。

ホームレスはすこし意地になったかのように空き缶を集め続ける。

ゴミ拾いの男は、その姿をみて、舌打ちをすると、あきらめたかのように去っていく。

去り際に、婦人とすれ違う。

ゴミ拾いの男 あ、どうも

婦人 あらあら、今日もゴミ拾いご苦労さまです。

ゴミ拾いの男 いえいえ、いいんですよ。自分の町がきれいになつたら、自分の心もきれいになるような気がするんです。

婦人 あら、いいこと言うじゃない

ゴミ拾いの男 それじゃ、僕はこれで。

婦人 ええ

といい、ゴミ拾いの男はホームレスの男とは逆のほうに去っていく。

婦人は、ホームレスのほうに歩いていく。

しかし、婦人はホームレスのほうを見ないようにしながら小走りに去っていった。
残ったホームレスは、空き缶を集め続ける。
と、そこに少女がやってくる。

少女 おじさん

ホームレスは、少女を見るも、すぐに空き缶の方に顔を向ける。

少女 なんて無視するの

ホームレス 学校いかないと

少女 だからそれはお互いさまだって。おじさんも仕事してないんだから

ホームレス・・・

少女 あれ、おじさん、何その服

ホームレス ああ、これ

少女 うん、どうしたの？

ホームレス 買った

少女 すごい、似合っているよ

ホームレスは、よくみるといつもとは少し違う生地のコートを着ていた。それでも、コート以外は汚なく、ホームレスの風貌には変わりない。

ホームレス ありがとう

少女 ねえ、気にしてるの？

ホームレス え？

少女 昨日、おまわりさんに言われたこと

ホームレス いやあ、べつに

少女 よかった。

ホームレス でも

少女 でも？

ホームレス もう会わないほうがいいと思う

少女 なんて

ホームレス こういうのはよくない。

少女 やっぱりにしてるじゃんか

ホームレス そういうことじゃなくて

少女 なに

ホームレス 君には帰る場所がある

少女 家族なんていない

ホームレス でも、引き取ってくれている人がいるんですよ

少女 でも家族じゃないもん、血繋がってないし。

ホームレス 血繋がってなくても、一緒にいたら家族だから

少女 じゃあ、家族

ホームレス そう

少女 おじさん

ホームレス え？

少女 おじさんも家族。

ホームレス そうじゃなくて

少女 そういうことですよ。

ホームレスは深いため息を吐きながら、

ホームレス 俺みたいなホームレスに家族はいらない。

と、言っただけで去っていく。

少女はついていこうとするも、ホームレスはこれまでにないくらいの勢いで

ホームレス 来るな

少女はそれにおどろき足を止める。

ホームレスはそのまま消えて行った。

少女は、悲しみをこらえながら、逆の方向へと進んで行った。

少女と入れ違いに大学生がやってくる。その近くに野球部の先輩がいる。
大学生は野球部の先輩に声をかける機会を伺っているようだ。

大学生 あのと

先輩 あ、おまえか

大学生 ちょっと話があつて

先輩 ん？

大学生 スパイク

先輩 なに

大学生 僕のスパイク、どうしたんですか

先輩 あー、あれ？捨てた。

大学生 え

先輩 いやさー、やっぱり前履いてたやつがよくて。なんていうか、履きなれてるのが一番じゃん。それで、捨てた。

大学生 捨てたって、僕のですよ

先輩は、鼻をかみ、丸めたティッシュを大学生に向かって投げ捨てる。

先輩 いらぬもの持っても仕方ないじゃん。ゴミをさ、わざわざ視界にいれたくないんだよね。

大学生 ゴミって・・・

先輩 あ。それ捨ててね

といいながら離れていく先輩

先輩がいなくなった後、大学生は丸めたティッシュを投げて怒りをあらわにする。丸めたティッシュは空気の抵抗で近くに落ち、それにイラついたように、ティッシュを蹴り飛ばす。それでも怒りはおさえきれず、道端にある石を拾っては投げる動作を繰り返す。

大学生

死ね。死ね。

と、つぶやきながら大学生は石を投げる。

すると、道端に「月の石」を見つけた。ちょうどいいサイズの石だったのか、大学生はそれをまじまじと見つめたあと、にやりと笑った後、それをポケットにしまう。

夜になり、ホームレスがやってくる。ホームレスは袋から空き缶をとりだし、潰している。

そこに大学生がやってきた。

大学生は、ホームレスの前に立つ。これまでとは違い、妙な雰囲気を出している。大学生は、ポケットから「月の石」を取り出すと、それを振り上げる。

暗転

朝になる。

ゴミ拾いの男は、スーツで仕事へでかけた。婦人はいつものようにゴミ出しに行っている。

大学生はなにごともなかったかのよう朝からランニングをしている。
警察官はいつものように自転車に乗って気だるそうに巡回している。
遅れて少女がやってきて、交差点の角に花束を供えなおしている。
いつものように行き交いが終わり、少女が一人残る。
少女はバス停のベンチに座ってホームレスを待つも、一向にやってこない。
あゆみが遅れてやってきて、その後ろからたけしがやってきた。

たけし あゆみ
あゆみ あ
たけし なあ、ごめんって
あゆみ なにが
たけし 傷つけて
あゆみ べつに謝らなくてもいいのに
たけし そうじゃなくてさ。
あゆみ そうじゃん、だって。たけしくんは悪くないじゃん。
たけし 俺が悪いよ。俺が悪い。あゆみが俺のこと好きってわかって、それで
あゆみ それで？
たけし それで…それだけど、おれ、人を好きになるってのがよくわからなくて
あゆみ うん
たけし だから、俺が悪い
あゆみ 悪くないじゃん、ぜんぜん。
たけし でもさ、あゆみがいないと寂しいっていうか、いつも学校行く時、あゆみがいなくて、それが当たり前やっと思ってる。
でも、いざ、いなくなったら、なんか違和感がした。

あゆみ わたし、忘れようとしたの。たけしくんのこと。どうせ、好きになってくれないなら、最初からいなかったことにしよう。見えないことにしようって。でも、無理だった。
たけし そんなこと言わないでよ。いるんだもん。ここにきて
あゆみ と、あゆみはたけしを引っ張って歩道橋の上に行く。

たけし なに
あゆみ あの横断歩道
たけし うん
あゆみ 横断歩道ってあっちからこっちか、こっちからあっちにしか行けないでしょ、
たけし うん
あゆみ だから一次元
たけし ああ
あゆみ だけど、それに交わる道路があつて、それで2次元
たけし この間、覚えたやつ
あゆみ じゃあ、三次元はどうなったらなるでしょう？
たけし え？地面は二次元でしょ
あゆみ ぶー、高さがあつたら3次元。
たけし だから？
あゆみ ここ、歩道橋
たけし ああ
あゆみ 生きてる感じするんだ。
たけし 生きてる感じ？
あゆみ うん、三次元ってなんか生きてる感じがする。
たけし どういうこと？
あゆみ こっからみてたらさ、今日も何も変わってない。生き
たけし ているんだって。私がいって、たけしくんがいって、お母
あゆみ さんがいてお父さんがいて、ゴミひろいのおじちゃん

や、おばさんがいる。

たけし

感じの悪い警察の人も

あゆみ

そんなこと言ったらまた怒られるよ

たけし

いいよ、別に

あゆみ

たけしくん。

たけし

うん？

あゆみ

月の石、捨てちゃった

たけし

ああ、いいよ別に

あゆみ

ごめん

たけし

本当の月の方がきれいだもん。

あゆみ

月が綺麗ですね

たけし

うん。いまね、あゆみの気持ち分かる気がする。

あゆみ

なにが？

たけし

すごい生きている感じる。

少女はしばらく待つともホームレスがやってこない。しびれを切らして、少女は、警察官に声をかける。

少女 あの

警察官 うん？

少女 おじさん、知らない？

警察官 だれ

少女 ほら、こないだ一緒にいたおじさん

警察官 だれだろう。知らないなあ

少女 ホームレスのおじちゃん。茶色いコート着た。

警察官 ホームレス？ホームレスねえ。この街にホームレスなんていたかなあ

少女 ひどい

警察官 ひどいって言ったってねえ、ホームレスなんてそんな

もんじゃない。誰も覚えちゃいないし、知らない間に

いて、知らない間に死んでいくんだから。

少女 死んでいくって…

警察官 もうとつくに死んでるんじゃない？

少女 やめてください。

警察官 もう、そんなに怒らないで、ね。お嬢ちゃん、学校行く時間じゃないの？

少女 探してください。

警察官 え？

少女 私の大切なおじさん。探してください

警察官 大切ってねえ、ホームレスでしょ

少女 家族

警察官 家族？

少女 ええ、大切な家族

警察官 …無理無理。誰かもわからない人を探すなんて無理ですよ。そりゃ、死体とかでてきたら別ですよ、それは

おおごとですから。でも、生きているかどうかかわからない人を探すなんて、そんな無駄なことしたくない

ですよ。

少女 無駄じゃないです。

警察官 ね、忘れましょうよ。いなかっただんですよ、最初から。

少女 もういいです。

と、言っただけ少女はバス停のベンチに戻る。

警察官 はあ。

と、警察官は去る。

少女は、ずっと待ち続ける。しかし、ホームレスは一

向にこない。

そのままだんだんと舞台は暗くなる。

舞台が完全に暗くなる。しばらくして、中央の花束だけ

が月の光に照らされる。

そして花束の周りが明るくなり、そこに少女が立っている。

少女の手元にももう一つ花束がある。

少女は、手元の花束をもとある花束の隣におく。

少女は、じっとその二つの花束をみている。

少女はゆつくりと立ち上がり、横断歩道を渡って去っていった。

しばらくして、花束にサーチライトがあたる。

そこには警察官がいる。警察官は無線を手に何か話している。

警察官あ、はい。また誰もないです。

ここで間違い無いですよね。以前、交通事故があつて母子二人がなくなつたところ。もう、勘弁してほしいですよね、まったくいたずらの通報なんて、何が楽しいのやら。

警察官が去る。花束を照らしていた月明かりがだんだんと消えて行く。少女がそこにいた記憶が消えて行くかのように、周囲は完全に闇に包まれた。

おわり